

青山学院大学 ジェンダー研究センター主催・文学部後援・英米文学科同窓会協力
「アメリカの一大学美術館における 一日本女性の奮闘記」

国際交流基金日本美術キュレーター 大木貞子 Ph.D.

2022年11月4日（金）13:20-14:50

[講演要旨]

本講演では、初めに講演者がジェンダー研究の専門家ではないことをお断りした上で、特に若い大学生・大学院生の皆さんの将来に役に立つことを念頭におきながら、アメリカの大学美術館のキュレーターとしての経験とそこへ到達するまでの道のりについてお話しする。

美術系の職場はキュレーター職を含めて女性が多い。イエール大学美術館の例をとってみると、他に教育部のキュレーター、登記担当、展覧会の準備担当、修復担当、IT 担当、広報担当、報道用カメラマン、その他さまざまな部署があり、守衛さんを除けば圧倒的に女性である。ただし、重要な職は男性が占めることが多い。とはいえ、イエール美術館の職員のほとんどが美術愛好家ないしはアーティストであり、仕事場に一体感があることはありがたい。

商業本位の大きな美術館とは異なり、アメリカの大学美術館の特徴は、その大学の卒業生の寄付で所蔵美術品が増加することである。異人種の集合体であるアメリカという国で、どの大学を卒業したかはその人の一生を左右するため、卒業生の愛校心の深さは崇高なほどである。ちなみに美術品相応の寄付額は免税になる。キュレーターは、コレクションが偏らないよう、寄贈された美術品と新たに買い付ける美術品とを吟味し、常設展と特別展を企画し、図録を作成し、自分の大学の学生のみならず一般の人々にも、所蔵する美術品を通して美と文化的価値とを伝える。

イエール大学美術館アジア部の日本美術の過去 24 年の成果を通じた経験談もお話しする。キュレーター職として仕事を成功させるためには、3 つの組織的協力が不可欠となる。第一に、美術館館長や教授陣を含む大学組織内部における協力体制、第二に、美術館経営の中核にある理事たちの中の日本美術愛好家の存在と彼らの協力、そして第三に、基金つきの日本美術キュレーター職（基盤となる資金が確保された常設のポスト）の確保と支持の獲得である。講演者の場合、初めのうちは上首尾であった。しかし、2012 年のイエール美術館展示空間の拡張に伴う財政危機が起これると、雇用をめぐる問題が続出し、微妙かつ巧妙な差別問題にも直面した。そこから、講演者個人の反省と修正も含め、大きな組織の中での生き抜き方を学んだ。

最後に、女性の自立に関して個人的体験を含めて考察する。